

2025年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・一般選抜) 問題

専門科目 日本文学 専攻分野

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

受験記号番号	
--------	--

成	
績	

2025年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・一般選抜) 問題

専門科目 (日本文学 専攻分野)

(注意事項) ① 第一問の解答は、答案紙二十行程度を標準とする。

② 第二問 1 から 5 までの解答は、それぞれ答案紙八行程度を標準とする。

③ 第五問の解答は、答案紙十七行程度を標準とする。

④ 第一問から第五問まで、すべて縦書きで解答すること。

1. 文学研究の意義とは何かについて、自身の見解を丁寧に述べるとともに、大学院で行う予定の自身の研究のテーマ、目的、方法をできるだけ具体的に説明しなさい。

二 次の事項について説明しなさい。

1 『万葉集』の作者層と詠風

2 養王（養宮・養院）と文学

3 藤原俊成

4 仮名草子

5 無頼派

三 次の和歌を翻字し、口語訳しなさい。

記に思ふは春の風
数に思ふは春の風

四、次の文章の全文を、表現内容がよくわかるように丁寧に口語訳しなさい。

そもそも、ことさらにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭、西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたたふ。島々の数を尽くして、そばだつものは天を指とし、ふすものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重に畳みて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、児孫愛すがごとし。松のみどりこまやかに、枝葉、汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。其の気色、窅然として、美人の顔を粧ふ。千早振る神の昔、大山祇のなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を尽くさむ。

（『おくのほそ道』より）

五、 次の文章は、志賀直哉「真鶴」(『中央公論』、大正九年九月)の冒頭部である。この小説を読み解く上で重要なポイントとなり得ると考えられる事項(モチーフ)と表現・語りの特性について、本文の記述を抜き出しながら説明せよ。なお、複数の事項(モチーフ)や表現等を取り上げてもよい。

伊豆半島の年の暮だ。日が入つて風物総てが青味を帯びて見られる頃だつた。十三になる男の兄が小さい弟の手を引き、物思はし気な顔付をして、深い海を見下す海岸の高い道を歩いてゐた。弟は疲れ切つて居た。子供ながらに不機嫌な皺を眉間に作つて、さも厭々に歩みを運んで居た。然し兄の方は独り物思ひに沈んで居る。彼は恋と云ふ言葉を知らなかつたが、今、其恋に思ひ悩んで居るのであつた。

こんな事があつた。或時、彼の通つてゐる小学校の教員が、新しく来た若い女教員と連れ立つて行く後から彼は何気なく従いて行つた。其時不意に教員が、「オイ」と云つて彼へ振返つた。「我恋は千尋の海の捨小舟、寄る辺なしとて波の間にく。お前に此歌の意味が解るかね」とかう云つた。かう云つて教員は笑ひながら女教員の顔を横から覗き込んだ。女教員は俯向くと、黙つて耳の根を赤くして居た。

彼も変に恥かしくなつた。自分がそれを云はれたやうな、又それを自分が云つたやうな気が一寸した。「どうだね。解るかね」と再び云はれると彼も女教員のしたやうに黙つて俯向いて了つた。そして、沖の広々した所に小舟のゆらりく揺られて居る様を、何と云ふ事なし絵のやうに想ひ浮べて居た。恋と云ふ言葉を知らぬ彼には素より歌の意味は解らなかつた。

真鶴の漁師の子で、彼は色の黒い、頭の大い子供であつた。

そして彼は今、其大い頭に凡そ不釣合な小さい水兵帽を兜巾のやうに戴いて居るのだ。咽は其ゴム紐で上げられて居た。此様子は恋に思ひ悩んで居る者としては如何にも不調和で可笑しかつた。然し彼にとっては不調和でも、可笑しくても、又滑稽でも、此水兵帽はさう軽々しく考へられるべき物ではなかつたのである。

受験記号番号	
--------	--